ゴールドブレンドコンサート倉敷

GOLD BLEND Concert 1983

音楽監督・指揮：石丸　寛

ゲスト：前橋汀子（ヴァイオリン）

オーケストラ：RSKゴールドブレンドオーケストラ

企画原案：石丸　寛
企画構成：森　千二
制作：RSK山陽放送
制作協力：（株）1002

主催：RSK山陽放送
提供：ネッスル株式会社
後援：山陽新聞社

1983年4月30日(土)　昼の部2:30 p.m.　夜の部6:30p.m.
会場：倉敷市民会館
［放送日］RSK山陽放送・テレビ5月7日(土)16:00～16:54
ラジオ5月8日(日)15:00～16:00

“ディスカバー・チャイコフスキー”

チャイコフスキー　Peter Ilyich Tchaikovsky

［第1部］　1. 舞踊組曲「くるみ割り人形」 作品71aより “花のワルツ”
2. ヴァイオリン協奏曲　ニ長調　作品35より
第1楽章：アレグロ・モデラート（ほどよく快速に）
———モデラート・アッサイ（きわめて中庸の速度で）

［第2部］　交響曲　第5番　ホ短調　作品64
第1楽章：アンダンテ（歩く速さで）
———アレグロ・コン・アニマ（活気をもって快速に）
第2楽章：アンダンテ・カンタービレ・コン・アルクーナ・リチェンツァ
（多少の自由さをもって、歩く速さで歌うように）
第3楽章：アレグロ・モデラート（ほどよく快速に）
第4楽章：アンダンテ・マエストーソ（歩く速さでおごそかに）
———アレグロ・ヴィヴァーチェ（生き生きと快速に）

前橋汀子（Teiko Maehashi, ヴァイオリン）

東京生れ。5才より小野アンナ女史に師事してヴァイオリンを始める。1950年、桐朋学園子供のための音楽教室に入り、13才で第1回リサイタルを開催。その後、桐朋学園高校音楽科でジャンヌ・イスナール、斉藤秀雄の各氏に師事、1959年第28回音楽コンクール特賞受賞。1961年レニングラード国立音楽院に留学、1967年、ロンティボー国際コンクールに入賞して注目を集めた。同年ジュリアード音楽院に留学、その後スイスでジョゼフ・シゲッティ氏に師事するかたわら演奏活動を行い、1969年イタリカのアルベルト・クルチ国際コンクール第1位入賞。1971年にカーネギーホールでストコフスキー指揮のアメリカ交響楽団との協演でニューヨークのデビューを飾ったが、その後はアメリカやヨーロッパの有名交響楽団との協演を中心に、多彩きわまる演奏活動をつづけている。日本でもその適確な演奏技術と深い音楽性が常に高い評価を得ており、いまもっとも広く活躍しているヴァイオリニストである。

チャイコフスキーとその作品

ピョトル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～1893）は、今日ではベートーヴェンと並んで、この日本でもっとも愛好されている作曲家のひとりといえましょう。彼は、幼ないころとくに音楽的にめだった才能を示したわけではなく、音楽家としての道を歩きはじめたのはかなり遅くなってからでした。しかし、それからは急速に才能をみせはじめ、続々と作品を発表して、ついには大作曲家に仲間入りするまでになりました。とくに40才以後の円熟期には重要な作品をたくさん残し、作曲家としては充実した一生を送っています。が、私生活は不幸の連続で、その最期も〈悲愴〉交響曲の初演の一週間後にコレラで突然死んでしまうという悲劇で幕を閉じています。わずか53才の生涯でした。

＊「くるみ割り人形」より “花のワルツ”

「白鳥の湖」「眠れる森の美女」と共に三大バレエとして有名ですが、そのなかではもっとも晩年の円熟した時期に書かれた傑作です。依頼されたのは1890年、50才の年でしたが、オペラや第2部で演奏される第5交響曲の作曲と取り組んでいた時期でもあり、アメリカ旅行の予定もあったりでなかなかはかどらず、全曲が出来上る前に8曲を選び出し、「舞踏組曲」作品71aとして先に発表したほどでした。バレエの初演は1892年のことです。“花のワルツ”は、第2幕で、こんぺい糖の精の侍女たちが踊る場面で演奏されるはなやかな音楽です。

＊ヴァイオリン協奏曲　ニ長調　作品35

チャイコフスキーは、ヴァイオリン協奏曲を1曲しかのこしていませんが、この曲は、ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスの作品と並んで、古今のヴァイオリン協奏曲のなかでもっとも多く演奏され、広く愛されている作品となっています。ちなみにこれらの大作曲家たちは、皆どういうわけかヴァイオリン協奏曲は1曲しか作っていません。しかしその1曲が、いまでは、数多いヴァイオリン協奏曲のなかで、もっとも重要なレパートリーとして貴重な存在となっているわけです。今日は第1楽章だけが演奏されます。チャイコフスキー独特の哀愁に満ちた旋律が、色彩ゆたかな管弦楽をバックにして流れるわけですが、演奏者には、きわめて難しい演奏技術が要求される曲となっています。1878年、不幸な結婚を解消してようやく立ち直ったころの作品。

＊交響曲　第5番　ホ短調　作品64

チャイコフスキーは交響曲を6曲のこしていて、そのうちでは、有名な「悲愴交響曲」（第6番）を含んだ後半の3曲が、世界中でたびたび演奏され、名曲としての高い評価を得ています。

チャイコフスキーの音楽は、ロシア民謡をうまく採り入れながら、“西欧風”な作曲技法を駆使したところから、いわゆる国民楽派とは区別されるのですが、どの曲にも彼独特の哀愁がこめられていて、それが聴く人の心をとらえ、全世界の人に愛される原因となっているようです。この交響曲第5番も例外ではありません。とくに「運命」をあらわしているといわれ、四つの楽章全部にわたってときどき顔を出す冒頭の旋律は、弱々しく、暗い気分が満ちていて、まるでチャイコフスキーの不幸な私生活を暗示しているようにさえ思えます。1888年、48才のときに彼自身の指揮によって初演されました。

RSKゴールドブレンドオーケストラ

トレーナー：菊池　東／田中一嘉
コンサートマスター：佐藤真理子
インスペクター：田辺幹夫
ライブラリアン：陶山容良

第1ヴァイオリン
佐藤真理子
菊池　東
稲田真理
中桐佐知子
浅井直樹
中上裕子
陶上容良
吉信雅庸
塚本千秋
今城真弓
河本めぐみ
高橋久子
中村博仁
武村寿子
田中栄一
藤米田健生
片山治夫

第2ヴァイオリン
池上俊昭
赤沢和美
橋詰万里子
三村卓司
木村啓子
大平典子
吉田精一
橋本文子
橋本洋子
藤野妙子

ヴィオラ
黒住彰夫
中野隆重
友野良一
武本克己
深沢秀雄
石川俊道
桑田道代
吉田典子
西田寛子
板谷清美
福森香代子

チェロ
西田毅雄
田中幹夫
中野啓子
森田真弓
田中光子
小原みずほ
黒田正典
石渡日出男

延藤聡子
枡本辰郎
松下修也
佐々木　昭

コントラバス
松本高広
本屋敷勝信
安田友子
曽我部仁和
松本圭子
塚田則彦
大熊桂子

フルート
坂口充倫
古川兼生
松岡倫代

オーボエ
有道　惇
角田容子

クラリネット
高杉玲子
川名光治
岡本あき

ファゴット
稲田裕彦

成本峰子

ホルン
新田　厚
吉市幹雄
西崎大修
川上　彰

トランペット
中桐　実
森田裕二
石原　憲
岡本卓也

ロンボーン
谷口一夫
佐藤道郎
佐藤正俊

チューバ
森峰茂樹

ハープ
中川麻里

パーカッション
平松泰一
西岡啓治
陶山京子

オーケストラ協力出演：倉敷管弦楽団

ゴールドブレンドコンサートニュース

ゴールドブレンド・コンサートは今年も
全国8都市で開催されますが、その幕あけが倉敷です。
このコンサートは今年で11年目を迎えました。
倉敷での開催は、一昨年につづいて3回目、
岡山県で催されるのは5回目ということになります。

意欲満々！倉敷管弦楽団

今回のオーケストラは、倉敷管弦楽団と一般応募の出演者によって編成されました。

倉敷管弦楽団は昭和49年に倉敷室内管弦楽団として創立され、以来、定期演奏会を中心とした活動を通して着実に成長してきましたが、このたび、その成果を示しさらに大きな発展を目指す意味で「倉敷管弦楽団」と改称しました。

同楽団はこれまでに8回の定期演奏会以外にも、多くのコンサートを経験してきました。一昨年の暮れには、二期会中国・四国支部といっしょに、モーツァルトの名作オペラ「魔笛」と取り組み、大成功をおさめました。その後、昨年の9月には、倉敷少年少女合唱団と共に、子どものための創作オペラを上演。今年10月には、再びモーツァルトのオペラ「フィガロの結婚」に挑戦する予定だそうです。これ以外にも、このゴールドブレンド・コンサートへの出演、また独自の定期演奏会の活動もあるわけですから、その積極的な姿勢には、ほんとうに頭が下がります。市民の皆さまも、この街のオーケストラに大きな拍子と力強い声援をお送り下さい。

オーケストラ・カップルにアテられ通し——

倉敷管弦楽団には、なんと8組のカップル奏者がいらっしゃるとか。今回のコンサートには、そのうち5組の方が出演していらっしゃいますので、ご紹介しましょう。

稲田裕彦さん（ファゴット）と真理さん（ヴァイオリン）、佐藤正俊さん（トロンボーン）と真理子さん（ヴァイオリン）、陶山容良さん（ヴァイオリン）と京子さん（ティンパニー）、中桐実さん（トランペット）と佐知子さん（ヴァイオリン）、松本高広さん（コントラバス）と圭子さん（コントラバス）、以上5組のご夫婦です。

このうち稲田さんご夫妻と松本さんご夫妻は、このオーケストラで結ばれた新婚ホヤホヤのカップルだとか。うらやましいですね。

こうして、同じ音楽を愛するご夫婦が増え、これにお子さんが加わって、さらに大きな輪になっていく——そんな将来を考えると、地方の音楽文化向上という言葉が、単に掛け声だけでなく、着々と実を結びつつあることがよくわかります。どうか、いつまでも仲良く、楽しい音楽に満ちた明るい家庭を築いていって下さい。

"やまもと寛斎のコーヒータイム"

ゴールドブレンドのテレビコマーシャル"違いがわかる男"にファッションデザイナー・やまもと寛斎氏が登場して話題を呼んでいます。日本の伝統美を描いた登場編から一変して、今回は寛斎氏のくつろぐコーヒータイムがテーマです。良き仕事仲間であり、氏のファッションをより輝かせてくれるマヌカンたちとコーヒーを飲む姿が華やかに描かれています。

舞台は海を見下す氏の別荘。その広いリビングルーム、実は駐車場に出現した巨大なセットなのです。風吹く中での撮影、出演者やスタッフの皆さんを暖かくしてくれたのは、寛斎氏の情熱でした。氏のエネルギーが優雅で楽しいコマーシャルを完成させてくれました。ぜひご覧下さい。

＊登録商標

GOLD BLEND Concert 1983

ゴールドブレンド コンサート

おかげさまで
Nestlé
70
周年
日本で愛され70年

手づくりの感動を、日本中に。

ステージに、客席に、この街の顔がある。
弾くよろこび、聴くよろこびに満たされた会場、
すべての目が、石丸寛のタクトを追う。
手づくりの感動がひとびとを熱くする。
この街で、あの街で、
そして日本中さまざまな街で
音楽を愛する心がひとつにとけあってゆく。

ごあいさつ

ゴールドブレンドコンサートは、おかげさまで今年11年目。石丸先生の熱心なご指導とスタッフの方々のご尽力、みなさまの暖かいご声援に支えられ、のべ100回をこえるコンサート活動にまで成長いたしました。ネッスルが日本に登場して70年目でもある今年、私どもは石丸先生・スタッフの方々と協力し、これまでにもましてすばらしいゴールドブレンドコンサートをお届けする所存でございます。本日は、どうかこころゆくまであなたの街の音楽家たちのすばらしい演奏をお楽しみください。今後ともこのコンサートに暖かいご理解・ご声援を賜わりますようよろしくお願い申し上げます。

ネッスル株式会社

ひとつのコンサートが100回をこえた。

いい音楽で日本をつつむ

ゴールドブレンドコンサート

1973年4月福岡でのコンサート以来、

ゴールドブレンドコンサートは

全国のべ100をこえる都市で開催。

出演者・観客あわせて

32万にのぼる方々に

生の音楽とふれあうよろこびを、

また、テレビ・ラジオを通して

数百万の方々に聴くよろこびを

お届けしてきました。

いつものクラシックコンサートとはどこか違うステージ。中学生が、お医者さんが、幼稚園の先生が、いつかこの街で見かけた顔がならんでいます。そして、客席にもこの街の顔。みんな、心から音楽に酔いしれています。指揮者・石丸寛氏のやさしい解説で始まる第一部。そして、地元のアマチュア音楽家たちのすばらしいアンサンブルが響きわたる第二部。ゴールドブレンドコンサートは、弾くよろこび、聴くよろこびに満ちあふれたコンサートです。

とかく中央に偏在しがちだったこれまでの日本の音楽文化。そんなワクをのりこえ、音楽の緑を日本中すべての街にひろげたいという願いから、1973年、ゴールドブレンドコンサートは生まれました。石丸氏と各地の放送局、新聞社、教育委員会が一体となり、地元のアマチュア音楽家・音楽愛好家のみなさんと手をとりあって創りあげるコンサート。ネッスルがそのお手伝いをして、今年1983年でもう11年目を迎えることになりました。

長い歩みの中には、いろいろな出来事がありました。このコンサートを機に、オーケストラが新しく生まれ定着した街があります。石丸氏のきびしい指導を通して、長足の進歩をとげたオーケストラがあります。コンサートに感動し、オーケストラに入団した人、楽器をはじめた人、クラシック狂になった人、さまざまな人がいます。毎年ステージを待ちこがれている人も数知れません。各地でのテレビ・ラジオの放送にも、ふつうの音楽会ではみられないほどの関心が集まっています。地元の音楽家たちが、心から地元の人々のために演奏する。そんなコンサートだから、音楽が生きているのです。輝いているのです。手づくりの感動でみたされたコンサート。ゴールドブレンドコンサートは、日本中さまざまな街で、ひとびとの心の中に根づいています。

生きている実感

中沢　桂　ソプラノ

世の中では、よく建前と本音という言葉をきくことがあります。でも、とても幸せなことに音楽の演奏ではそんなことは言っていられません。その人そのものしか存在することが出来ないのです。石丸先生も、そんな本音人間の御一人だと感じています。おたがいにぶつかり合い、感じ合いながら、音楽を生み育ててゆく有難さ。ゴールドブレンドコンサートのステージで、客席と舞台にひとつの心が通い合った時のすばらしさは、生きている実感といってもいいものです。石丸先生やスタッフの方々に、私は沢山の感謝と拍手を送らせていただきたい気分です。そして、このコンサートでお会いした多くの方々とまたどこかで御一緒したいと願っています。

魅せられっ放しのコンサート

徳永二男　バイオリニスト

石丸先生から初めてゴールドブレンドコンサートのお話を聞き、出演させて頂く事になったのはもうずいぶん昔の事になる。初めて参加した練習の事。もちろんアマチュアなのだから、いざ音を出してみると音程が合わない、音の出が揃わない…等々技術的な問題点は種々あった—ところが練習を進めていくうちに、先生の熱意と適切なアドヴァイスによって、そうした点を乗り越え音楽に生命が吹き込まれる。いつか私も、その中で夢中になって弾いていた。練習が終わってからがまた楽しい。集まって話すうちに、話題は自然とコンサートをどう成功させるかということになる。みんな根っからの音楽好きなのだ。それ以来、私はこのコンサートに魅せられっ放しである。

'73 10都市 ●23,772人 ■2,955人

福岡市（4月）	●2,750人	■275人
札幌市（5月）	●2,158人	■400人
松山市（7月）	●2,562人	■330人
広島市（7月）	●1,854人	■270人
熊本市（8月）	●2,550人	■289人
新潟市（9月）	●2,450人	■302人
静岡市（10月）	●3,586人	■354人
金沢市（10月）	●1,844人	■215人
長野市（11月）	●2,195人	■210人
仙台市（11月）	●1,823人	■310人

'74 14都市 ●37,304人 ■3,400人

山形市（4月）	●1,977人	■444人
長野市（5月）	●3,300人	■230人
高知市（5月）	●1,760人	■296人
岡山市（6月）	●2,800人	■499人
札幌市（6月）	●2,408人	■233人
仙台市（7月）	●2,670人	■270人
松山市（7月）	●3,362人	■327人
長崎市（8月）	●3,015人	■233人
広島市（9月）	●3,015人	■261人
金沢市（9月）	●1,998人	■230人
熊本市（9月）	●3,042人	■ 93人
福岡市（10月）	●2,293人	■ 91人
新潟市（11月）	●3,213人	■ 87人
清水市（12月）	●2,451人	■106人

'75 11都市 ●30,442人 ■2,641人

長野市（5月）	●2,371人	■243人
松江市（6月）	●2,800人	■280人
岡山市（7月）	●2,820人	■130人
仙台市（7月）	●3,365人	■236人
山形市（7月）	●1,709人	■516人
福島市（7月）	●1,567人	■263人
熊本市（8月）	●2,919人	■ 87人
長崎市（9月）	●3,560人	■ 81人
松山市（9月）	●3,192人	■358人
新潟市（10月）	●3,038人	■ 87人
鹿児島市（12月）	●3,101人	■360人

'76 9都市 ●29,984人 ■2,028人

金沢市（5月）	●2,790人	■ 92人
福島市（7月）	●3,909人	■296人
長野市（7月）	●3,138人	■223人
長崎市（9月）	●4,150人	■102人
広島市（9月）	●4,561人	■235人
松江市（12月）	●2,036人	■111人
新潟市（12月）	●3,930人	■280人
山形市（12月）	●2,152人	■434人
鹿児島市（12月）	●3,318人	■255人

'77 10都市 ●30,881人 ■1,689人

長岡市（5月）	●2,032人	■169人
松江市（6月）	●2,835人	■ 65人
福島市（7月）	●5,200人	■106人
熊本市（7月）	●2,442人	■ 85人
高松市（7月）	●2,303人	■281人
長崎市（9月）	●4,800人	■ 93人
甲府市（10月）	●2,366人	■346人
那覇市（12月）	●3,541人	■205人
防府市（12月）	●2,455人	■ 68人
高知市（12月）	●2,907人	■271人

'78 10都市 ●32,171人 ■2,056人

青森市（4月）	●2,234人	■274人
新潟市（5月）	●3,655人	■205人
松江市（6月）	●3,254人	■188人
甲府市（7月）	●3,307人	■532人
那覇市（8月）	●3,400人	■ 72人
長崎市（9月）	●4,553人	■107人
高松市（9月）	●2,398人	■ 83人
倉敷市（11月）	●2,562人	■352人
札幌市（11月）	●3,402人	■ 62人
盛岡市（12月）	●3,406人	■181人

'79 11都市 ●34,052人 ■2,284人

弘前市（4月）	●1,672人	■322人
松江市（6月）	●3,272人	■ 92人
盛岡市（6月）	●3,224人	■338人
長岡市（7月）	●2,919人	■161人
姫路市（9月）	●3,179人	■198人
長崎市（9月）	●3,311人	■106人
金沢市（10月）	●1,777人	■251人
甲府市（10月）	●3,888人	■348人
那覇市（11月）	●3,500人	■ 54人
静岡市（11月）	●3,870人	■139人
高松市（12月）	●3,440人	■275人

'80 9都市 ●31,423人 ■2,050人

熊本市（3月）	●2,791人	■106人
青森市（4月）	●2,454人	■349人
長岡市（6月）	●2,665人	■136人
盛岡市（6月）	●3,556人	■262人
甲府市（9月）	●3,953人	■396人
松江市（10月）	●3,846人	■456人
宮崎市（11月）	●3,908人	■ 72人
静岡市（11月）	●3,850人	■104人
神戸市（12月）	●4,400人	■169人

'81 9都市 ●28,214人 ■1,224人

藤沢市（2月）	●2,073人	■327人
弘前市（5月）	●2,515人	■ 93人
長崎市（5月）	●3,706人	■101人
長岡市（6月）	●2,620人	■ 75人
神戸市（8月）	●2,645人	■107人
倉敷市（9月）	●3,840人	■259人
静岡市（11月）	●3,294人	■ 91人
宮崎市（11月）	●3,306人	■ 84人
高松市（12月）	●4,215人	■ 87人

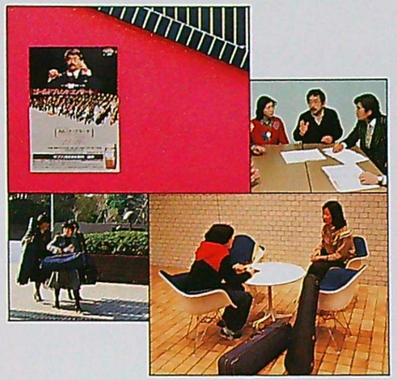
'82 7都市 ●21,127人 ■1,156人

松江市（4月）	●2,562人	■104人
天童市（6月）	●2,001人	■ 77人
新潟市（7月）	●3,676人	■ 79人
長崎市（9月）	●3,800人	■272人
宮崎市（11月）	●3,425人	■193人
福井市（11月）	●2,267人	■ 91人
静岡市（12月）	●3,396人	■340人

全国100都市
観客総数 299,370人
出演者総数21,483人
●観客数 ■出演者数

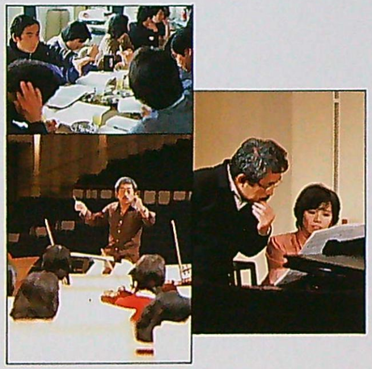
この一日のために

ゴールドブレンドコンサートは公演の数ヵ月前からスタートします。曲が決まり、人が集まり、練習がくりかえされ、やがて公演を迎え――そのひとつひとつの過程がゴールドブレンドコンサートなのです。たとえば昨年静岡で行なわれた100回目のコンサート。参加者の目を通して見たその素顔をご紹介します。



▼

8/25 ゴールドブレンドコンサートのための練習初日。演奏する曲目はカール・オルフ作曲の「カルミナ・ブラーナ」。曲名しか聞いたことのない幻の名曲である。ゴールドブレンドコンサートの100回目を記念して選ばれたのだという。オーケストラ・コーラスあわせて400人近い大メンバー。これだけの人を集めるだけでも大変な苦労だったろう。よくこの曲をやることに決まったと思う。もちろん静岡では初演である。曲を聴いたことのない団員が多いので、初日はレコードを聴くことからスタートした。大変な曲。本当に我々に演奏できるのだろうか。



9/8 オーケストラの練習始まる。各自練習してきてはいるのだろうが、そろえるとバラバラ。練習指揮の田中一嘉さんのタクトも、ちょっとふられてはストップの連続である。コーラスとのつなぎがわからないので、まだ全体像をつかむことができない。コーラスの人たちも同様だろう。変調子の多いこの曲を歌うのは相当つらいことだと思う。

10/12 週1回のオーケストラの練習も、今日で5回目。ようやく曲の体裁をとりはじめてきた。各自必死で練習しているよう。僕も毎日コントラバスにさわっている。曲のもつ意味も、田中先生の説明でしだいに分かってきた。ただ、変調子にはみんな泣かされている。

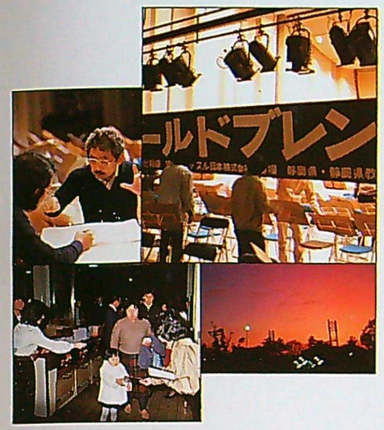
11/28 石丸先生をまじえたはじめての合同練習。なんと250人が集合する。コーラスとオーケストラが一同に会して、はじめて両方の音のバランス、タイミングのとりかたが分かってくる。先生の大声が練習の間中響き続けた。なんだか「カルミナ・ブラーナ」がつかみとれたような気になってきた。今日の新聞には、コンサートの告知広告が出ていた。僕の名前が新聞にのった。これでいよいよ後には引けない。

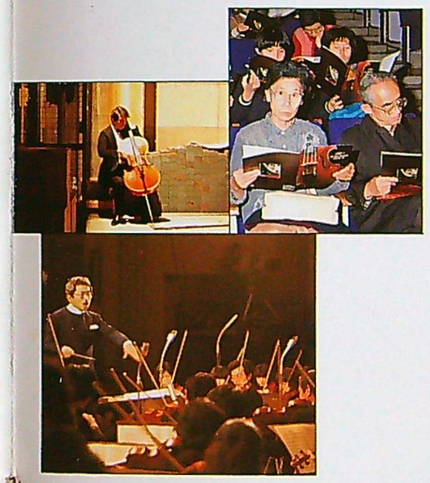
12/16 あと3日。本番を行なう市民文化会館で合同練習。石丸先生のタクトは決して妥協を許さない。ちょっとした呼吸のみだれも見のがさずやりなおしが続く。しかし、確実に全員がまとまり始めている。先生のタクトに魔法をかけられているようだ。

12/17 いよいよ明日。最後の練習だ。細かいやり直しが続く。ステージ全体がピ～ンと張りつめているようだ。2時間の練習に石丸先生は汗だく。全員、先生のことばを一言も聞きもらすまいと真剣な目をむけていた。まだ不安はある。でも、やるべきことはやった。心を静めて、あとは本番を待つだけだ。

12/18 何といったらいいのだろう、この感激。昼の部、夜の部と二回の公演。そのどちらもこれまでの中で最高の演奏だった。ものすごくまぶしいライトの中で、ただ石丸先生しか見えない。オーケストラとコーラスが巨大な音のうねりとなって僕を包む。いつまでも鳴りやまない拍手の中で、僕は宗教的ともいえる感動にひたっていた。カルミナ・ブラーナ、この曲を僕は一生忘れることがないだろう。

（大石喜久雄・コントラバス）





コンサートに参加して。

竹本ゆかり 福井県丹生高校3年

練習中は、やめたいと思った時もあり、涙する事も幾度かありました。しかし、今ほんとうに続けてよかった、やってよかったと感じています。コンサート当日は、もう無我夢中で弾きました。特に夜の部での「ラデッキーマーチ」の時は、「このまま続けばいいのに」と切実に思い、終わった時には目の前がかすんでくるほど。聴いて下さった先輩に「どうでしたか」と尋ねたら、先輩はいささか興奮気味に「すごく感動した。よう頑張ったな。」と固く握手をして下さり、「ああ、私たちの音楽で人が感動してくれたんだ。」と感無量でした。これからも、ずっとこんなコンサートを続けてほしいと思います。

舞台裏のコンダクター

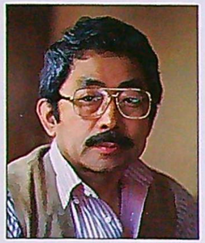
岩本靖臣 MRT宮崎放送

ゴールドブレンドコンサートを担当して丸3年が過ぎました。このコンサートの悩みは練習場の確保。局のスタジオ、公民館、カトリックの礼拝堂、仏教会館と、さまざまな場所をさがし回り、まさに音楽に国境無し、の心境です。もちろん、職場がひけて夕食もとらずに練習にかけつけてくれる人の顔を見るとそんな苦労も吹き飛んでしまいますが…。晴れの公演当日となると、弁当の手配から、楽器運搬の予約、楽屋の部屋割りなどてんてこまいの忙しさ。それでも、ステージがおわると本当にすばらしいことをやりとげたという充実感が広がります。出演した人のあの顔、この顔。音楽を通して、感動というものを教えてくれた人々のこと。一生忘れることができません。

1983 ゴールドブレンドコンサート 開催スケジュール

- 4/30(土) 倉敷市
- 6/4(土) 山形市
- 8/20(土) 福岡市
- 9/10(土) 徳島市
- 10/23(日) 甲府市
- 11/5(土) 宮崎市
- 11/27(日) 福井市
- 12/24(土) 静岡市

音楽は緑



「きみは、そこの樹を美しいと思うかね」街を歩いている時に、父が私に訊ねた。私が小学校の二年か三年生ぐらいの頃だったと思う。咄嗟(とっさ)に質問の意味がつかめないで、私は父の話を待った。私が生まれて育った青島(チンタオ)という街はプラタナスやアカシヤの並木の美しいドイツ風の都市だったが、父が指さしたのはその並木の一本だった。一本の樹を見て美しいと思う人もいれば、何も感じない人もいる。美しいと感じる人は、モノを見る眼が有るのであり、何も感じない人は見る眼を持っていないのだ。だから、美というものは、あちら側に有るというよりは、投げかけるこちら側に有ると考えた方がよい、と父は言うのであった。幼い私には難しい話だったが、それでも、何故セザンヌが林檎を描くのかが自分なりにわかってきたような気がした。セザンヌは他の人が気付かない林檎の美を感じていたのだ、と。

音楽は、もしかしたらこの樹のようなものかもしれない。樹の緑に関心なく通り過ぎてしまう人がたくさんいるように、音楽もムリに、強制して聞かせるものではないだろう。(カラオケは、あれは音の暴力だ。) しかし私たちは、やはり緑の多い街を作ることに積極的に生きてゆきたい。緑を見たい時に緑が無いのでは困る。ふだん関心を持たない人が、ある日突然、緑を見たくなった時のために、豊かな大きな樹の繁る森や、公園の若々しい草花を私たちは積極的に用意しておかねばならない。高松や金沢にある公園はほんとに美しかった。そして宮崎の県庁前の楠の並木は、いつも私の心を洗ってくれる。

自然と神と音楽とが一体だったベートーヴェンに倣(なら)うまでもない。音楽は緑なのだ。

石丸寛
指揮者

音楽に囲まれて

音楽は私たちスイス人にとっては、スキーやチーズと同じく生活の一部です。私が生まれ育ったスイスの村も人口2,000人ほどの小さなところでしたが、生活の中に音楽が息づいていました。子供たちは母の歌声を聞きながら育ち、美しい丘や澄んだ川に囲まれた村の教会では、大人も子供も一緒になって唱いました。男たちは集まればスイスの歌を唱い、また祭りになれば村のいたる所にスイスの民謡が響きわたりました。村のオーケストラというものは特にありませんでしたが、声をかければちょっとした交響曲が演奏できるくらい、いろいろな楽器を弾ける人たちがいて、村のあちらこちらから楽しげな演奏が聞こえてきたものでした。

日本にいても音楽は欠かせません。いつも軽いクラシックや懐しいスイスの音楽に囲まれて暮らしています。神戸や大阪で開かれるコンサートへも時々行きますが、日本の皆さまの演奏のすばらしさにはいつも心をうたれます。日本古来の音楽ばかりでなく、ヨーロッパのクラッシック音楽さえ自分たちのものにしてゆくバイタリティーには本当に感心させられます。私自身も子供の頃フルートを長い間習っていましたが、残念ながら当時は練習があまり好きではなく、心から音楽を楽しもうという余裕も持てなかった気がします。しかし今考えますと、育った音楽環境に感謝せずにはいられません。若い時に音楽の楽しさを知ればそれは一生の喜びとなることに気づいたからです。

音楽を愛するひとりとして、私は若い皆さまがなにかひとつでも楽器を弾くことを通して、その音色の持つ美しさを知って下されば と願っております。

ネッスル株式会社 代表取締役社長
H・J・シニガー

おかしな、おかしな音楽家たち。

むずかしそうな顔をした音楽家たちも、ベールをとれば、ふつうのひと。
ゆかいなエピソードがたくさんあります。
コンサートのあい間に、コンサート後のコーヒータイムに、
音楽家たちの意外な素顔をのぞいてみませんか。

Beethoven
美女には弱い？ベートーヴェン

ベートーヴェン(1770～1827)というと私たちはすぐに、恐ろしいようなしかめ面で髪をふり乱している様子を想い浮かべてしまいがちです。数々の恋愛をし、ことごとく破れ、生涯を独身で通した彼ですが、その間にはこんな微笑ましいエピソードもあります。

ベートーヴェン52歳の時。あるソプラノ歌手2人が彼を訪れました。2人は16歳と19歳のうら若き乙女。その時のことを、彼は弟にあてた手紙にこんなふうに記しています。『きょう女性歌手が2人訪ねてきた。彼女たちはわたしの両手にキスをしたがったが、なにしろ大変な美人たちだったので、わしは口にやってくれ、と申し出ましたぢゃ。あらあらかしこ』

以後2人は彼のお気に入りとなり、2年後「第九」の女声の独唱はこの2人がやったそうです。

Gluck
グルックのおかしな作曲法

グルック(1714～1787)は、ワーグナー以前の最大のオペラ改革者といわれていますが、その作曲法は、非常にユニークなものだったようです。ここに、彼の作曲風景をこっそりのぞき見した、ある音楽家の記録があります。――

『……突然かれはいろいろな種類のいすを動かして、室内に舞台の書き割りのかべのようなものを作り、それから音をとるためにチェンバロのところにもどった。そしてそれから両手で仕事着のはしを持って、バレエのアリアを口ずさみながら若い女の踊り子のようなおじぎをし、いすのまわりをすべり歩き、片足のつま先で立ち、飛び上がっている間にかかとをいく度も打ち合わせるアントルシャーをやり、おしまいにはポーズも動きも、とりすました歩きかたも、オペラの妖精のそれをあらわしていた。……』

Mozart
モーレツ愛妻家モーツアルト

世に愛妻家と言われる殿方は数多く(？)おられるようですが、さてその人たちも、ここにご紹介するモーツアルト(1756～1791)の愛妻ぶりには、思わず脱帽なさることでしょう。

ある朝のこと。起きるとすぐに散歩に出る習慣のあった彼は、妻を起こさないようにそ～っとベッドを抜け出して、こんな手紙をまくらもとに置いて出かけました。

『おはよう、愛するかわいい妻よ、つぎのことを願います。お前がよく眠れたことを、お前を何ものもわずらわせなかったことを、お前があまりにも急に起き上がらないことを、お前がかぜをひかず、腰を曲げず、伸ばしもせず、使用人たちにハラを立てず、つぎの部屋では敷居につまずいてころばないように。私が帰るまでは家事上のめんどうなことには手を出さないこと。お前にだけは何事も起こらないように！』。

Hindemith
“汽車汽車シュッポッポ”のヒンデミット

ヒンデミット(1895～1963)は作曲家として、ヴィオラの演奏家として、指揮者として、教育者として、そして著述家として、多方面にわたる活躍をした人ですが、そんな彼にも模型の電気機関車を走らせるという無邪気な趣味がありました。住まいの一室を電気機関車用にわりあてて、縦横に線路をしき、駅や信号、鉄橋、トンネルまで作ってあったということです。そこで彼は小さくてコロンと太った体でひざをついたり腹ばいになったりしながら、ピーとかポーとかいって機関車遊びに喜々として熱中。童顔で、あいきょうたっぷりの体つきの彼の、この時の様子は、まるで子供のように無邪気で、なんともいえないくらいかわいらしかったといいます。

(監修－武川寛海)

NESCAFÉ GOLDBLEND

オーバーマイヤーのハープ
(Stil "Empire")

表紙のハープは、ハーピスト篠崎史子さん所有のオーバーマイヤー製ハープ。西ドイツ・ミュンヘンの近くで製作されています。米国のライオンヒーリーと並んで、世界の著名なハーピストやオーケストラに使用されている超一流品。生産台数は非常に少なく、製作は全てオーダーメイドで、発注後2〜3年はかかります。特にこのStil "Empire"はオーバーマイヤー製品の中でも最高のモデル。我国には、2〜3台しか輸入されていません。

№ 01947

*REGD. TRADEMARK ゴールドブレンド/ゴールドブレンド/ネスカフェ・ゴールドブレンド/GOLD BLEND は登録商標です

ネッスル株式会社